


文化庁委託事業
「平成 24 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」

平成 24 年度
江戸系あやつり人形 結城座
人形遣い体験育成入門 報告書



開講にあたって

江戸のはじめに産声をあげた結城座が、来年で 380 周年を迎える。

その江戸時代、日本には沢山の糸あやつりの人形遣いたちが、多くの場合小さな座を組み、しのぎをけずりあい芸を磨きながら、江戸を中心にして各地で活動をしていた。そしてこの糸あやつりという日本人独特の感性が生み出した繊細で、同時にしなやかな強さを持った芸能は民衆に愛され続け、演者から観客へ師匠から弟子へと様々な人と人との関わり合いのうちに、私達の生きる現代にまで伝えられて来た。しかしその長い時間の中で様々な時代の流れに翻弄され、その人形つかいたちは一人一人と姿を消して行き、江戸で生まれて江戸で育った結城座だけが残った。これは本当に奇跡に近い事だろう。それ故に今、私達は重大な責務を感じている。それは優れた後継者を育て、同時に多くの人々にこの長い歴史を生き抜いてきた魅力的な日本の糸あやつり存在を広め、更に未来へと奇跡のひとこまを積み重ねていかなければならないのである。

結城座はこの伝統芸能の人材確保に積極的に取り組み、更により多くの人たちにこの日本特有の文化を実体験してもらいたいと考え、結城座稽古場での入門塾を始めとし、様々な形で様々な年齢層を対象にしたワークショップ[®]を行うなど、地道に育成事業に取り組んできて来た。

そして平成 23 年度、文化庁委託事業として小金井稽古場での人形遣い入門塾をスタートさせ、今回平成 24 年度も引き続き、入門塾を開催する事となった。昨年度の 7 ヶ月に比べ、9 ヶ月と期間も長くなり授業数も増えて、更に幅広いカリキュラムの計画が可能となったのである。

古典芸能の一つである江戸糸あやつり人形を学ぶには、当然古典一般の知識が必要とされるが、そのため私たちの活動にご賛同下さる各界の実力者の方たちが、今回も特別講師を勤めて下さり、基本的な古典演劇の知識を学ぶ機会を持ち、又古典にとどまらぬ芝居づくりの講座をも体験し、合わせて人形実技との大きな相乗効果を得る事も出来た。こうして各界の皆様のお力添えを得て、今回も更に内容の濃い充実した時間を持つことが出来たのである。私達は、今後この糸あやつりという日本の貴重な文化を伝えていく機会を、更に、更に重ねて行かねばならないと痛感している。

結城座



目次

開講にあたって	1
全体の講義概要	3
人形実技（結城座 人形遣い一同）	4～8
日本舞踊（西川右近 先生 西川鯉之祐 先生 西川貴美子 先生）	9
古典の台詞（市川笑三郎 先生）	10
鳴物（田中傳次郎 先生）	11
演劇史（渡辺保 先生）	12
芝居の作り方（加藤直 先生）	13
読む、語る、歌う（大石哲史 先生）	14
受講生のアンケートより	15
人形実技の講義を終えて（結城孫三郎 結城千恵）	16
最後に	17

全体の講義概要

●実施期間 平成24年6月～平成25年2月

●授業日 月・水・土曜日

(人形実技2時間=1コマ その他の特別講義90分=1コマ)

●参加者数 11名 (女性6名 男性5名 / 30代 3名 40代 2名
50代 1名 60代 4名 70代 1名)

●講座一覧

科目	講師	授業数
人形実技 (実習を含む)	結城座人形遣い一同	86コマ (172時間)
日本舞踊	西川右近 西川鯉之祐 西川貴美子	6コマ (9時間)
古典の台詞	市川笑三郎	7コマ (10.5時間)
鳴物	田中傳次郎	4コマ (6時間)
演劇史	渡辺保	3コマ (4.5時間)
芝居の作り方	加藤直	3コマ (4.5時間)
読む、語る、歌う	大石哲史	2コマ (3時間)

●実習

平成24年9月 「ミス・田中」 (於 池袋・東京芸術劇場シアターウエスト)

出演 稽古見学 裏方

平成23年11月 「結城座スタジオ古典公演」 (於 結城座稽古場)

稽古見学 観劇 裏方

平成25年1月 「芝浜の革財布」 (於 座高円寺) 出演 稽古見学 観劇 裏方

平成25年2月 成果発表会「千人塚」 (於 結城座稽古場)

人形実技 (86 コマ)

講師：結城座人形遣い一同

●開講式

今年度の塾生は、昨年度の塾生 1 人を含め、10 名。最年少は 30 歳、最高齢は 78 歳、性別は半々、幅広い年齢層の方が参加し、程よいバランスでのスタートとなった。

まず結城座の歴史や人形の機構、遣い方を解説。次に人形の操作盤である「手板」の持ち方、人形を遣うときの遣い手の姿勢、立ち方などを学ぶ。そして人形の足の裏を感じ立たせてみる。この足の裏を感じしっかりと立たせるということが、まず人形を遣う上で重要になる。さらに足の糸を使い、足踏みの稽古を行う。人形の基本的な操作を学んだあとは、人形掛けに正しく人形を掛けるやり方や、正座をして手をつき、「ありがとうございました」という、正しい挨拶を教わる。

手板を水平に持ち、持ち上げた人形をゆっくりおろす。下は見ずに、人形の足の裏で地面を感じる。



●6月～7月（人形遣いのフォーム・糸の位置・足踏み）

塾生は新たに 1 名加わり、11 名となった。

手板を水平に持ち、人形を丁度良い高さにキープしての足踏みを徹底して稽古する。人形は、手板を水平を保ち足の裏を感じながら高さを一定に保ち続けるのが難しく、その為の使い手の基本的なフォーム（力を抜く、膝を緩める、手板と胸の間の‘ふところ’をあける等）を正していく。

基本である足踏みの稽古を続けつつ、前進したり、Uターンしたり、お互いにぶつからないようにすれ違ったりバリエーションを増やしていく中で、空間把握の稽古もしていく。また、

平均して17本ある人形の糸の位置を、すこしずつ覚える。



人形遣いの体のフォームや、糸の持ち方などを学ぶ

●8月～9月（結城座公演「ミス・タナカ」に参加するための稽古・本番）

9月の結城座自主公演「ミス・タナカ」において、群集シーンで塾生を参加させることに。登場シーンも多く、歌を歌ったり駆け回ったり、3ヶ月しか稽古を積んでいない者がやるにはかなりの試練であったが、客席を意識した人形の遣い方、頭(かしら)の動かし方、対象への意識の向け方など、高度な技術を学び、何より本物の舞台に立つことで急成長を遂げた。

舞台では人形を遣う他、道具の出し入れを行う裏方も経験し、また受付でお客様を迎え入れるなど、総合的な公演の場を体験した。



「ミス・タナカ」稽古 自分の人形に集中するだけでなく、周りの人形や空間を把握して演じる。



「ミス・タナカ」舞台本番 プロの人形遣いに混ざり群集シーンを演じる。最高齢 78 歳の方も舞台にあがる。

●12 月（結城座公演「スタジオ古典公演」稽古見学 観劇 裏方）

塾の稽古を行っているスタジオに客席とステージを組み立て、主に地元地域のお客様を迎えて行う「スタジオ古典公演」を、12 月の金土日 5 回に渡り行う。立てられた舞台（江戸時代から伝わる「本足場」といわれる人形の舞台）に上がる体験をする。高さや足場の細さにとても驚く。この公演の中では、初めて結城座の古典公演を間近で見ることができ、また、客席の準備や案内、茶話会の対応など、お客様と身近に接し、芝居づくりの側面的な部分も体験することができた。



結城座スタッフと共にお客様を迎える



結城座スタジオの門前でおお客様をご案内する

●1 月（結城座公演「芝浜の革財布」出演 稽古見学 観劇 裏方）

落語「芝浜」を初の人形芝居化した古典公演。塾生の中で専門コースを選んだ 3 人は初めて役名のある役をもらい、共に稽古し本番を迎える。演出の西川右近氏からも丁寧な指導を受け、大きな前進となる。他の塾生もプロの芝居作りの様子を間近に見学した。また開演を迎える為の準備・お客様対応などを結城座スタッフと共に行った。



「芝浜の革財布」メザシと呼ばれる三体連な
った人形を操る。地面を感じて両足を動かす
という人形の基本は変わらない。人形が持つ
小道具作りと、人形への持たせ方も学ぶ。

●1月～2月（成果発表会へ向けての稽古・成果発表会「千人塚」）

基本稽古のほか、座る、走る、ジャンプする稽古などを行う。成果発表会にむけて「千人塚」の台本を配役にあわせて覚える。役ごとの基本の手順を教わり、役作りにそった感情表現をしながら客席に届く声や相手に台詞をかける、関係性を作るなど、人形の操作とともに人形芝居の重要なことを学ぶ。また時間外にも自主稽古をするなど、発表に向けて積極的な意欲を見せた。

試演会では、舞台作りのあと稽古とリハーサルを経て、4グループが順番に発表を行った。日常では体験できない緊張感の中で、各自の成長と、一年間の成果を感じる発表会となった。



正座とお辞儀を教わる。手の糸をさばいたのち、腰糸と頭を動かす糸の三本を同時に持ち、手板を前に倒し首を下げるという高等技術を要する。

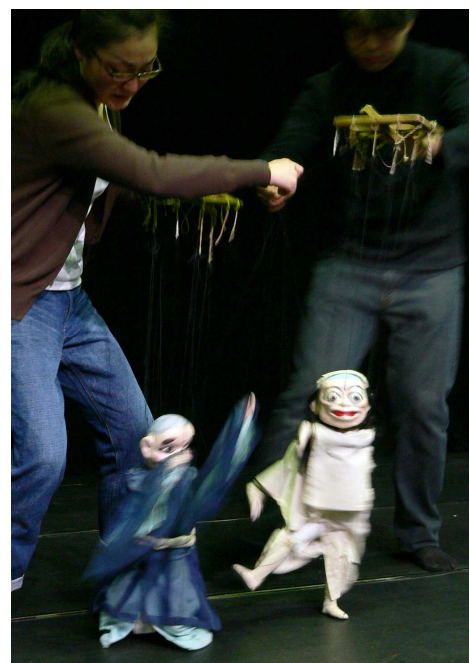
発表会に向けて、「千人塚」の稽古。座長より役ごとに丁寧な指導を受ける。



《成果発表会「千人塚」》



「骨よせ」と言われる江戸時代から伝わる技法。骸骨の首や手足が離れたりくつついたりする。(ここでは首のみ)



成果発表会終了後の茶話会。一年間の感想やこれからの思い、結城座へ期待することなどを語り合う。

座長・12代目結城孫三郎より修了証を授与



特別講義 日本舞踊 (6コマ)

講師：西川右近 先生 西川鯉之祐 先生 西川貴美子 先生

● 講義を終えて

人形で芝居をする為に、またそれを介錯や舞台転換等 周囲で支える者に必要な要素の一つとして、日本舞踊を学んで頂きました。立ち座りやお辞儀、摺り足の仕方などの所作の基本を通じて舞台上で無駄なく美しく動くことを、「男の踊り」「女の踊り」の双方を学ぶことを通じ、役の違いにより「気持ちの入れ方」「体のつかい方」「間のとり方」がどのように変わるかということ、会得まではいかなくとも、感じ取って貰えたのではないかと思います。人形を扱う為に、且つ舞台に立つ為に活かせるものを意識しながらお稽古を続け、この体験をもとに表現を深めて下さい。そしてこの芸能に様々な形で関わり、支え続けて下さい。(西川鯉之祐)

● 講義概要

着物の着方・扇子の扱い・摺り足・立ち座り・正座・お辞儀の仕方から始め、女の踊りとして「御所車」男の踊りとして「五万石」を指導して頂いた。

- 第一回 着物の着方・所作の基本・扇子の扱いを学ぶ 「御所車」
- 第二回 首振り・向きの変え方・おすべり等を丁寧に復習 「御所車」
- 第三回 所作の基本を復習 「御所車」
- 第四回 「御所車」 男おどりの基本を学ぶ 「五万石」
- 第五回 「御所車」 足の割り方・首振りを復習 「五万石」
- 第六回 「御所車」「五万石」 お濠い 細かく手順を追いながら復習



特別講義 古典の台詞 (7コマ)

講師：市川笑三郎 先生

●講義を終えて

昨年度受講した皆さんの様子を踏まえて一部教材に変更を加え、歌舞伎のセリフをテーマに古典のセリフ術を体験して頂きました。短い期間ではありましたが、歌舞伎の台詞独特のリズムや心地よさ、歌舞伎の役者が古典の方法を用いながら如何に感情移入やキャラクターの演じ分けをするのかを体感して頂けたと思います。うわべだけの「らしさ」を真似るのではなく、講義で取り上げた「歌舞伎のセリフの特徴」を意識しながら、根本に近づくような方向で今後も挑戦して下さい。(市川笑三郎)

● 講義概要

歌舞伎のセリフの特徴を以下の通りに整理。

①七五調の言葉 ②言葉の母音となる生み字を唄うように言う ③独特なイントネーションを付けて盛り上げる ④鼻濁音に気をつける ⑤様式(音楽的)の中にリアルな心理を込める。

これらを意識しながら各回のテーマに挑戦する。

第一回 『歌舞伎の台詞』のいろは 歌舞伎十八番の内「毛抜」より「根元草摺引」より

歌舞伎の古典作品に潜む意外な現代性。現代に共通する点を探りつつ、歌舞伎独特の台詞廻しを体験する。

第二回 義経千本桜「椎の木」より

歌舞伎の丸本物の世話物から、会話に見る喜怒哀楽を取り上げて、歌舞伎の台詞廻しを用いてキャラクターの演じ分けと感情移入を学ぶ。

第三回 義経千本桜「椎の木」より

前回のおさらい

第四回 弁天娘女男白浪「稲瀬川勢揃い」より

歌舞伎代表作から、お馴染みの白浪五人男のツラネを例題に、台詞のリズム、七五調の心地よい歌舞伎の台詞廻しを学ぶ。

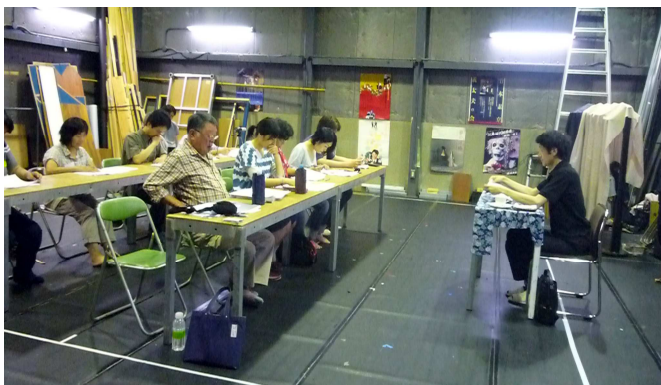
第五回 弁天娘女男白浪「稲瀬川勢揃い」より

前回のおさらい

第六回 伽羅先代萩「御殿」より

義太夫狂言の名作「伽羅先代萩」の御殿の場より、台詞と義太夫の三味線に乗せた掛け合いの「ノリ台詞術」を用いて、音楽的に台詞を唄いながら感情を乗せる術を学ぶ。

第七回 全ての復習と総まとめ



特別講義 鳴物 (3コマ)

講師：田中傳次郎 先生

●講義を終えて

本年度も結城座さんの歌舞伎黒御簾音楽・大太鼓奏法の講義をさせていただきました。実技では水の音、浪の音、風の音など自然描写を動きや景色を想像しながらの稽古でした。歌舞伎音楽はただ演奏技術だけではなく、そのように 動き・景色・心理を音で表現されます。なので私の講義は音楽の稽古だけではなく、古典の感覚や感性の稽古にもなるように努めました。

また生徒さんには実技だけではなく、黒御簾のお話しや伝統と伝承の難しさなども学んで頂きました。結城座さんの生徒はいつも熱心に取り組んでくれるので毎回時間が延びてしまいますが、ひとつでも多くのことを学んで頂き伝統芸能への理解が増 してくれることを願います。
(田中傳次郎)

●講義概要

第一回

総合芸術である歌舞伎の重要な一面を担う鳴物について、儀式音楽、自然描写、寺社音楽があることを学ぶ。お客様から見えなくても美意識を持ち、役者に合わせて共に舞台を作る姿勢を学ぶ。お手本を見つつ、自分の中にイメージを持ち、実際に打ってみる。

第二回

自然描写である水音、雪音、波音、雨音、雷、滝、さざ波、の表現について実演・解説していただき、一人ひとり指導して頂く。

第三回

おぼけのドローンの音、儀式音楽である一番太鼓、着到、シャギリ、打ち出しについて実演・解説していただき、一人ひとり指導して頂く。



●講義を終えて

1日目は、現代にも通じる物語である古典劇(能、狂言、文楽、歌舞伎)について、2日目は、能「葵上」、文楽「義経千本桜 道行」の解説、人形劇の様式について、3日目は、歌舞伎「義経千本桜 四段目 河連館の段」の解説をさせていただきました。他の古典劇を学びながら、人形というものが単に人間らしく動くことが第一目標ではなく、人間では出来ない、人形だからこそ出来る表現、つまり役の底にある深いところを、純粋に表現する力を持っているという事を意識していただければ幸いです。今後も、台詞を発する人間(人形遣い)と、人形の動きが一体化するように工夫してお稽古に励んでください。(渡辺保)

●講義概要

第一回 ・古典劇と現代劇との相違について学ぶ。

古典劇は、それぞれが特殊な舞台様式を持っており、女性の役は全て男性が勤め、仮面劇である(歌舞伎は厚化粧、隈取)という特徴がある。

対して現代劇は、特殊な劇場を持っておらず(現代劇はオープンステージ)、女性の役は女性が演じ、顔の表情を表現の一手段とし通常仮面は使用しないという特徴がある。

戯曲の構造の違いとしては、古典劇は語り物、叙事詩であるが、近現代劇は、今ここで起きるドラマを描いたものである。

演技形態の相違としては、古典劇は“芸 役者の私”と“役の私”の同時共存であるが、近現代劇は舞台上で生きるのは役のみ、役者の私は抹殺して演じられる。

第二回 ・古典の戯曲を読み解く。

能の作品「葵上」の戯曲、文楽「四段目 道行初音の旅」の戯曲を、解説を聞きながら読み解く。

第三回 ・古典の戯曲を読み解く。・人形芝居でしか表現できない表現方法について学ぶ。

文楽「四段目 寺子屋の段」の戯曲を読み解きながら、人形にしかできない表現について学ぶ。



特別講義 芝居の作り方 (3コマ)

講師：加藤直 先生

●講義を終えて

前年度の内容「演劇とは何か？」を少しでも展開させるために、今回は具体的に自分の身体や声を使って表現が（劇場の表現が）何故現在(いま)ほど必要とされ、もっともっと考えなければならないかを、参加者と共に試行錯誤することになりました。

俳優の専門家、各スタッフの専門家はとりあえずいるが、観客の専門家は、では存在するのだろうか？

人形にしても俳優にしても歌手にしてもそれを表現する人だけでは表現は成立しません。それに面と向かい様々な感情を通してレスポンスする観客「他者」が必要です。その他者によって演技や表現作品はさらに発展するのです。

そこで今回は参加者がグループワークで声と身体を使い、表現する側と、それに立ち会う「他者」（異なる世代・性・生い立ち・価値観を持つ）観客となって、スケッチを行いました。（加藤直）

●講義概要

他者と自分を考えることにより、表現とは何か、演劇とは何か、考え学ぶ。

第一回

- ・日常の中で実際に目にした「他者を感じた場面」を話し、議論する。
- ・自分とは違う他者がいることによって表現は表現になりうる(他者の目がなければ、表現は表現にならない)ことを学ぶ。

第二回

- ・他者の身体に触れ、他者を感じながら、身体を使って表現する。
- 3つのグループに別れ、テーマになった物を身体を使って形作り表現する。(ヤカン、橋など)人の身体に触れながら形を作り表現し、他グループに批評されることにより、「他者」を感じ、表現とは何か考え学ぶ。

第三回

- ・身体を使った表現を「他者」に見せ批評してもらう。
- 3つのグループに別れ、それぞれのグループでテーマを設定し演じて表現し、他グループの人に批評してもらう。
- テーマ：「〇〇を運ぶ」、「〇〇に驚く人々」（〇〇は各グループで考え、声には出さずに表現し、「他者」である観客に伝わるように演じる）



特別講義 読む、語る、歌う (2コマ)

講師：大石哲史 先生

●講義を終えて

自分が声を発する事にあまりにも困難がある人が多くて、ちょっとびっくりした。日常の中でもストレートに自分の意思を表わす事が不得手な感じだ。

そこで少し「うたう」要素を使った方が、「かいほう」するのではないかと思い。オペラの一部を使って、メロディーを感じながら言葉を開放していく事は出来ないかやってみると、序々に、あるいはみるみる、自然に言葉が出てきたようだ。言葉をつかさどる脳とメロディーをつかさどる脳とは、左右違うと言われるが、そうかも知れないなと再認識した。(大石哲史)

●講義概要

オペラ「あまんじゃくとうりこひめ」のテキストを使いながら、声・歌の表現を学ぶ。

第一回

自分の体の中を見る。言葉を出そうとするのではなく、ある事象に対するリアクションとして、心が動き、体の中が動き、そこで作られたものが声として外に出ることを学ぶ。

キャラクター、きっかけ、相手、相手との距離を体の中で作り、再現する。

第二回

動物の鳴きまねなどで、声帯の傍で振動が起こらないような声の出し方を学ぶ。話す時と同じように声を出しながら音程をつける。



受講生のアンケートより

人形実技の講座について

- ・それぞれのスピードに合わせていただける、丁寧な授業でありがたかった。間があいてもフォローでついてくれる人がいるなど親切な進み方でした。
- ・私の感じる力が強いのか弱いのか、集中力が持続出来るのか否か、あれもこれも試されたようです。真剣に指導いただきました。
- ・人形を操る身体のことや舞台を意識した動きや位置など実践的な内容で多くの事を学び、考える事が出来ました。
- ・年齢差、遅刻者、欠席による遅れをとる人たち、全ての塾生に公平であり、ある時は厳しく、不得手な者には懇切丁寧に、毎回感謝の念を持って受講させて頂きました。

外部講師の方による特別講座について

- ・観客として観てはいても、創る側の呼吸づかいまで聞こえてくる様な内容の講義を受けて深さを感じることを得ました。
- ・今までに考えたこともない世界をのぞかせていただいて珍しく、楽しかったです。“時間が短い” “あっもう終わり？” 等とおっしゃって皆様熱をこめてお話し下さいました。
- ・古典伝統芸とは何か、演劇とは、その中で基本的な技などなど、初心者が学び体験する滅多にない機会であり、楽しい時間でした。

講座の曜日、時間帯、回数などについて

- ・仕事や学業、体調や通路時間など、それぞれ諸条件はあるにしても、今回の時間は適切であった。
- ・私は土曜日が定休ではないので、休みを取るのが大変でしたが、連続2コマは必要な時なので仕方がないだろうと思います。都心部に勤めている身に平日19時集合はかなり大変でした。人形実技以外の授業も2時間でもいいのではと思いました。
- ・週三回は大変という思いと、これくらい最低でもないと思古にならないとも思う。
- ・平日昼間のコースも良いのでは。

入門塾全体について

- ・老人の素人が9ヶ月で何が出来る、出来なくて当たり前と思っていたのですが、これで終わりというのではなく研修の時間を作って戴きたいと思います。
- ・芝浜の公演に参加させて頂き、座員の他に沢山の人がいて、それぞれに働かれています。こんなに人が関わっていたんだと驚きました。
- ・自分は人形つかいを目指すものとして入塾しましたが、糸あやつりという芸能文化とそこに内在する日本人ならではの意識を門戸を広げ一般にも体験できる事は、ものすごく貴重な機会であると思います。そしてこれだけ広い分野と生の現場を学べ、色々な年齢層の塾生たちと一緒に悩んだり、励ましたり一体になれる授業は結城座だからこそできた事だと思います。

人形実技の講義を終えて

今年度の塾生は前年度の生徒より、かなりハードな主題を与えられたと思います。

まずは基本訓練は当然のことながら、9月に東京芸術劇場で行ったオーストラリアのジョン・ロメリル原作「ミス・タナカ」の舞台に立つという目標に向かっていました。人形の基本訓練と同時に、上手、下手という言葉から、その他舞台に必要な用語まで、こと細かに覚えなくてはならず、生徒たちは無我夢中の中、必死だったと思います。

前年度の生徒も「乱歩・白昼夢」の舞台に立ちましたが、関東大震災の場面で逃げ惑うというシーンのみでした。今回の塾生は各自がキャラクターを決めて台詞も言い、全員が与えられた人形のサイズにあった小道具作りの体験もやる等新しい展開を加えました。生徒たちの場面はなかなかおもしろく客席の評判も良かったようです。

この本番終了後、安堵感からか稽古も単調になり、スタジオ古典公演の裏方についたり、その後2013年の1月「芝浜」の結城座自主公演においては何人かの塾生が舞台に立つなどの経緯の中、生徒たちのテンションが波のように上がったり下がったりしたのです。

塾の最終月、2月に入って発表会の課題を決めました。前年度では各自に「口上」をやらせましたが、今年度は全員に芝居をさせるという目標を立て、古典「千人塚」を演目としました。全員にやらせる事はかなり無理かなとも思われましたが、各々実力の差はありましたが全員が一つの事に向かい全力で立ち向かった事は、私個人としては満足のいくものでした。

そして、生徒の中から3人がプロの道を目指す事になりました。

他の生徒からは、野球でもプロと草野球があるように、折角人形で演じる楽しさを体感できたのだから、結城座の中でアマチュアの集団を作れないかという提案も生まれました。この貴重な意見を実現出来るように・・・何とか考えなくてはいけないと思っています。過去の塾生からも人形による生きがいを求めていることが、ひしひしと伝わってくるのです。私の中で、重要なテーマとしと心に刻まれました。

十二代目 結城孫三郎

まず最初に必ず我々がやる事は一般的な男の人形を使い、どこに糸が付いていて、どのように使うかを丁寧にレクチャーする。皆さんが知りたいのは糸は何本位で人形の重さはどれ位で何センチ位の大きさなのか、そして器用又は、不器用は関係あるのか位である。そして実践に移るのだが、彼らの想像もしていなかった困難な作業へと踏み出す事となるのだ。

日に日に身体のあちらこちらが痛み出し、いくら日常の筋肉の使い方と異なるとはいえ、小さな人形に振り回されている自分に腹立たしさを覚えることもあろう。私達は大雑把な教える流れは持っているが、生徒さんの体調や、心情を考慮しながらその時々に変更していく必要があるので、人形だけではなく生徒さん一人一人に気をくばらねばならない。非常に疲れる作業ではあるが、うまく出来た時は2倍の喜びが味わえるのは役得とも言えよう。

雨の日も風の日も足を運んでくる生徒さん達とは、いつしか目標を一つにした仲間に思えてくる不思議な関係である。年齢も性別も職業も関係なく人形に取り組む姿は格闘技に近い。実は人形を使う時に最も大切な事は安定とリラックスが基本なのだ。半年も過ぎた頃になると少しずつ皆の表情や姿に不必要な堅さが薄らいでいく。今まで見せなかった様な感情の変化や思考の変化が人形を通して見えてくる。別に人形がうまく使えなくても良いのではないか。私はこの変化を待っていた気がしてならない。

長い歴史を持つ人形と他の先生方の授業を通して彼らの中に眠っていた日本人のDNAが目覚めようとしている。このようなすばらしい物に立ち合わせてもらえた事を心から感謝したい。がんばって下さった皆さんありがとう。

結城千恵

最後に

入門塾の始まりの日、塾生を前にいつも思う。彼らは何を求めているのであろうかと。勿論、私達は糸あやつり人形について教えるしか出来ない。だが彼らは糸あやつり人形を通して何か別の物も求めている様に思えてならない。人間は生活の為に働く。しかしそれだけで生きているとは言えない。スポーツやカラオケやダンス等で発散出来る人もいるが、どうも我が入門塾に集まる人達はその手の人々ではない気がする。糸あやつり人形を学ぶ事によって自分の中の霧の掛かったような何かを探している人や、生活の中の居心地の悪さを見直そうとしているような人が多い。当然、多くのサークルに参加して来た人もいる。だが、人形を見ていると明らかに両者の違いが見えてくるのだ。しかし皆共通して、実に辛抱強い。4ヶ月頃までは自分の体が思うように動かず、従って人形はもっと動かない。全身に痛みが走り、歯を食いしばる様に頑張る。なのに講師達からは力を抜けと要求され続ける。人形を使う基本は、まずフォームを安定させ、それをキープさせつつ脱力しなければいけない。確かに難しい事なのだが、体の痛みを乗り越えた頃には少しずつ身に付いてきて人形の動きも増えてくる。やっと面白さが分かり始める。


このような稽古を繰り返し積み重ねていく内に、どんなに下手であろうが一生懸命人形を使わない限り人形は存在できず、言い換えれば今その人形に取って自分は唯一の必要な人であり、どんなに素晴らしい人形であっても使い手がいなければ人形は唯の物に過ぎない事に気付く瞬間が稀に訪れるようだ。人間と人形が糸を通して結ばれた時の姿は本当に美しい。すると初めの頃の彼らとは全く違う表情を見せてくれる。自分の中にしまい込んでいた負の思いや違和感は薄らぎ、何とも伸びやかだ。彼らを見ていて、糸あやつり人形が斯くも長い歴史の中に生き続けてきた理由の一旦を改めて納得させられた。糸あやつり人形の持つ力は実に大きい。この感動を多くの人々に伝えたいと切に願うと共に、今や仲間となった塾生たちのエネルギーをもらい、我々も前進せねばと心から思う。

結城座



結城座



文化庁委託事業 [平成 24 年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業] 

主催:文化庁

公益財団法人 江戸糸あやつり人形 結城座

国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」 「東京都無形文化財」

〒184-0015 東京都小金井市貫井北町 3-18-2

TEL 042-322-9750

FAX 042-322-3976

Email info@youkiza.jp

<http://www.youkiza.jp/>

協賛：コーヒーホールくぐつ草 東レ株式会社 東京コカ・コーラボトリング株式会社

協力：株式会社コクテール堂

印刷：社会福祉法人 東村山けやき会 平成の里